

第16回遊びのプログラム等に関する専門委員会	参考資料
令和3年3月17日	3-1

児童館等における遊びのプログラムの開発・普及と普及方策を検討するための

調査研究業務 報告書（一部抜粋）

実施団体：一般財団法人 児童健全育成推進財団

本調査研究では、全国の児童館等において活用することができる遊びのプログラムを開発、普及するとともに、その普及方法のあり方を検討することを目的として、①全国3か所の大型児童館等で健全育成に関する関係者を対象としたワークショップを開催し、児童館等で利用することが多くできる遊びのプログラムを開発、②開発したプログラムを地域の児童館等で実施するとともに、③地域の健全育成に関する関係者を対象に、開発したプログラムを紹介し、体験できる「遊びのプログラム実践交流会」を開催した。

実施体制

企画・検討委員

白田好彦（認定NPO法人カタリバ シニアマネージャー）

石井碧（プロ・ナチュラリスト）

杉本拓哉（国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局秩父学園作業療法士）

引原有輝（千葉工業大学 創造工学部 教育センター 教授）

1. 企画・検討委員会の開催

本事業の実施に際しては、有識者による企画・検討委員会を設置し、専門的助言を受けた。

（1）開催日と場所

第1回 令和元年6月10日（月）10:00～12:00 日本薬学会ビル1階 会議室C

第2回 令和元年11月11日（月）17:00～18:00 児童健全育成推進財団会議室

第3回 令和元年12月16日（月）10:00～12:30 国立青少年総合センター センター棟405

※令和2年2月28日（金）15:00～17:00に最終回を開催予定であったが、新型コロナウイルス感染予防の観点から開催を中止、企画・検討委員には書面での確認とした。

（2）検討内容

- ・事業概要の共有
- ・ワークショップ実施方法の検討
- ・子ども、保護者向けアンケートの項目検討
- ・遊びのプログラムの普及効果の検証
- ・事業全体のふりかえり
- ・本事業の調査研究報告書の作成

2. 遊びのプログラムの開発と出前事業の実施及びその検証

(1) 遊びのプログラムの開発ワークショップの実施

①コンセプト

平成30年に改正された児童館ガイドライン（以下児童館ガイドライン）に明記された大型児童館の役割の中に、プログラムの企画・開発がある。その開発力を養うため、野外遊び、運動遊び、発達支援の3カテゴリーで1泊2日の開発ワークショップを3箇所で行い、実際にプログラムを開発した。研究メンバーは遊びを実践する小型児童館の視点を入れながら開発するため大型児童館・小型児童館ペアで募集した。

また、開発にあたり児童館ガイドラインのポイントである、子どもの主体性、合理的配慮を加味することとした。詳しい実施イメージは図1、プログラム開発の視点は図2の通り。

図1 実施イメージ図

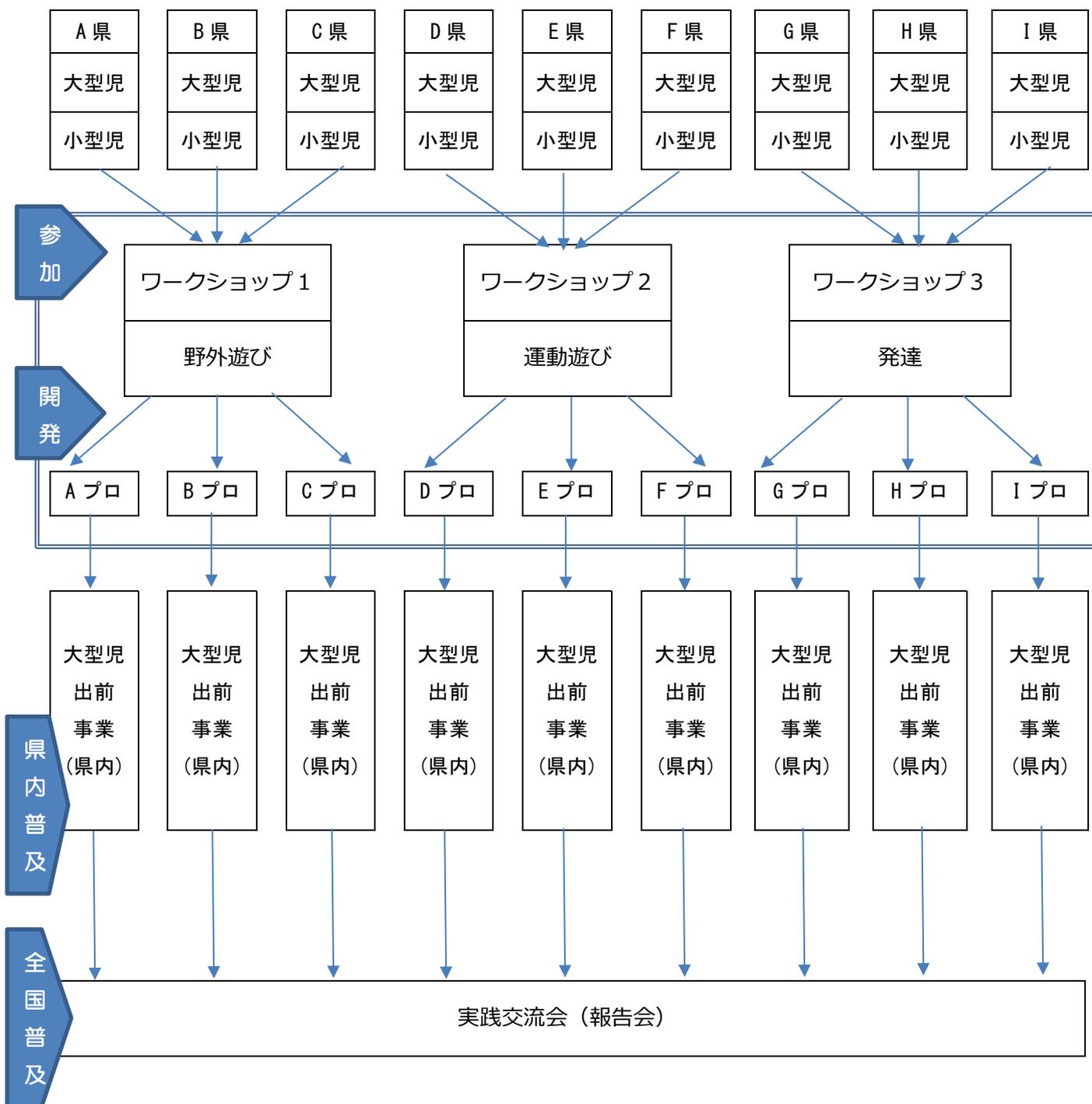
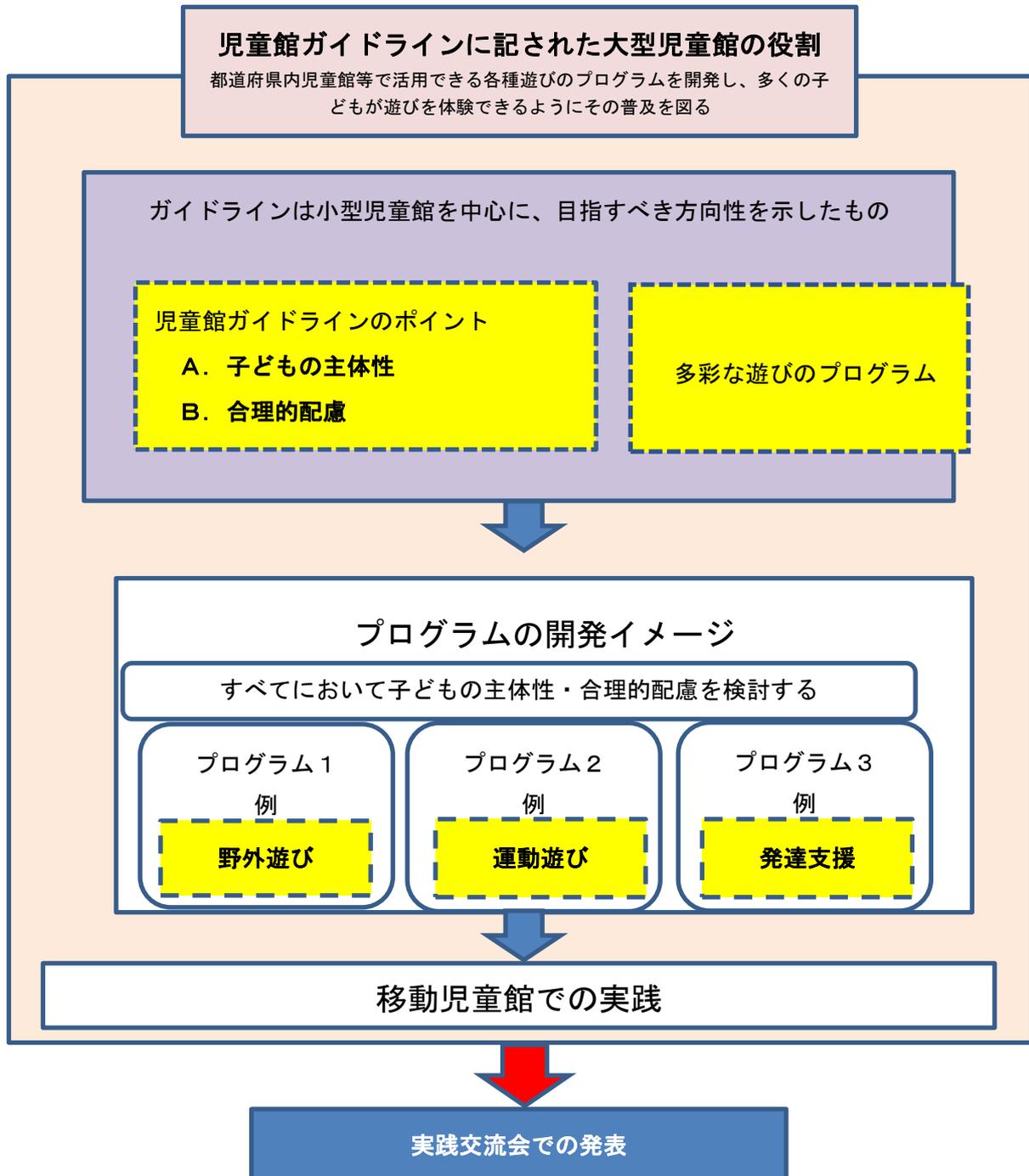


図2

プログラム開発の視点





児童健全育成推進財団（鈴木一光理事長）は16、17の両日、児童発達支援センターから、遊び館での遊びのプログラム開発に関するワークショップを開催した。2018年10月、児童発達支援センターから、遊び館での遊びのプログラム開発に関するワークショップを開催した。2018年10月、児童発達支援センターから、遊び館での遊びのプログラム開発に関するワークショップを開催した。

「誰もが楽しめる遊びを」 健全育成 児童館職員がプログラム開発

児童健全育成推進財団（鈴木一光理事長）は、発達障害も合理的配慮が求められる児童に寄り添った取り組みとして、今年度、全国的に「誰もが楽しめる遊び」の開発を進めている。この取り組みの一環として、今年度、全国的に「誰もが楽しめる遊び」の開発を進めている。この取り組みの一環として、今年度、全国的に「誰もが楽しめる遊び」の開発を進めている。

新たな遊びプログラム 児童健全育成財団、シンポで紹介

児童健全育成推進財団（鈴木一光理事長）は16日、児童館の遊びのプログラム開発検証シンポジウムを都内で開いた。全国から集まった児童館職員に対して、今年度大規模児童館と小規模児童館が共同開発した新たな遊びについて、開発過程も含めて実践方法を紹介した。新たな遊びは、全国



ポスターを使った説明も実施した

から応募のあった大型児童館と小規模児童館でワークショップを開き、「野外遊び」「運動遊び」「発達支援」の3テーマでそれぞれ開発した。発達支援のテーマで紹介したのは、ファミリア運動会。スポンに投入したしぼを取り合う家族でしぼとりと「玉入れ」、「フルーツバスケット」の3種目で得点を競うというものだ。どの遊びも、一般的な児童館や保育所などで行われているものとは異なる。開発に携わった兵庫県の児童館・こどもの館の上山哲平さんは当初、障害児向けに競技を行う際のハンディキャップを設けることを考えたが「行き過ぎた配慮は子どものためにならない」として最低限のものにとめたことを明かした。会場内には、ファミリア運動会も含めた3テーマ・12の遊びのプログラムを説明するポスターが置かれ、テーマごとの遊びの紹介の合間に参加者がそれぞれ興味のあるポスターの前に行き、詳細な説明を聞く時間も設けられた。参加者は、これらのプログラムを各児童館に持ち帰り、現場ことにアレンジを加えながら実践していくことになる。（濱本高佑）